覚え書き

有坂　広一

外人部隊

『外人部隊』は一九五三年の制作だから、もう六八年前の映画である。『舞踏会の手帖』や『望郷』のマリーベルを観たかったのだが、案外と印象は希薄であった。恋の話よりも存在感のあるホテルの女主人ブラッシュ（フランソア・ロゼ）に興味を覚えた。外人部隊というのは、社会で食い詰めたり、悪事を働いたりして、行き場を失い、どうしようもない連中の吹き溜まりである。中でも女主人の友人のイワノフ伍長は、「俺はここへ来て、過去を帳消しにする権利を買ったんだ」

などと言う怪しげな輩である。つまり外人部隊には、居場所や死に場所を見出しているような連中ばかりである。イワノフは援軍に自ら志願して戦死する。遺品を整理するピエルとブラッシュはイワノフの載っている新聞を発見して、ちらと見ただけで、彼のことを、

「国では、何者だったんだろう」

「革命家か芸術家か、殺人犯か・・・」

と話しながら深く追求することなく焼き捨ててしまう。しかし、

「どっちにしろ、彼は私たちの中で一番不幸だったわ」

ブラッシュは涙を流す。イワノフは一般社会では否定される存在でしかなかった。畜生か屑か、そのたぐいだろう。たとえ、どういう人間だろうとも外人部隊は受け入れるということだ。行き場を失ったあぶれ者の映画として観ると、今の時代にも響いてくるものがある。

小林多喜二の恋人

プロレタリア文学もはるかに遠のいた。乱読時代にいくつか読んだが、それなりに興味をそそられた。小学生か中学生だったか、地元の映画館で友人と多喜二（一九〇三～一九三三）の『蟹工船』を観た。関心があったからではなく、映画なら何でもよかった。船上には加工設備が整っていて、蟹の缶詰を製造する作業場になっている。乗組員は過酷な労働が強いられる。子供だった私はあまり感じるものがなかった。それよ

りも映画の途中、立見席で観ていた大人が突然号泣したのには驚かされた。後ろを振り返って見ると、中年の男性が、柱に片方の肩を持たせかけて、館内に響き渡るような大声を立てているのだ。身も世もない姿に私は心を打たれた。もう映画のストーリーは頭に入らず、上の空だった。きっと過去に辛いことがあったに違いない。

話は変わるが、ある会社に勤めていた頃、私はフォークマンにからかわれたことがある。彼は私の雰囲気を見て、こう言った。

「あんたは小説家志望のなれの果てだね。俺も若い頃は、図書館に通って、小林多喜二や魯迅を読んだよ。読みだすと夢中になってな」

魯迅を「ろじゅん」といったのは愛嬌である。しかし私は「なれの果て」じゃないよ、これからも書くからな…と小声で呟いた。彼のことも短編に書いて発表したことがある。ただしプロレタリア文学的な思考には関心はなく、深く考えたこともない。それから長い年月が経った。ある日、新聞に多喜二関連の記事が出ていた。小林多喜二の恋人田口タキさんという見出しで、横浜の自宅で亡くなっていることが分かった。享年一〇二歳で老衰と見られる。記事によると、多喜二は二四年から六年間、北海道拓殖銀行に勤務していた。当時、市内の飲食店で働いていたタキと知り合い、自宅に住まわせたが、タキは自活の道を選んで、行方を告げずに小樽を去った。その後、彼女を訪ねたが会えなかった。戦後になって別の男性と結婚した。多喜二が特高警察に逮捕され、拷問を受けて、死去したことを何かで知ったに違いない。その悲惨な痛ましい状況をどう思ったろうか。

丹波哲郎の名言

人は死んだらただ消滅するだけで、来世も前世もない。したがって霊魂なるものも存在しない。だけど世の中には死後の世界を信じている人もいる。それもいいだろう、私は異論を唱えるつもりはない。わざわざ反対論を唱えて他人の領域を侵すことはないのだ。仏典には死後の世界について一行も触れていないそうだ。また聖書は生きている人たちのためにあるという。にもかかわらず天国だの地獄だのと言うのは何故だろう。児童文学者の石森延男の『母なる人』の中で、二十歳で亡くなった長女のことを書いている。長女は高熱に悩まされながら、父親の石森に、「私はどうしたらいい

の」としきりに尋ねた。石森は死を覚悟した娘に何も答えられなかった。つまりこの世を去るにあたって、どんな気持ちを持ったらいいのか聞いているのである。それで親戚のクリスチャンに相談するとその人は長女によく分かるように話してくれた。「ここにいるお父さんよりも、ずっといいお父さんが天におられる。そこに行くんだから幸せさ、誰よりも先に行くんだから幸せじゃないか」と。じっと聞いていた長女は迷いから吹っ切れたように、平安のうちに天に召された。聖書は生きている人のためにあるのだ。天国の話がたとえ幻想であってもいい。それが救済になるのだから。

ところで霊界に詳しい丹波哲郎は生前、「私は死ぬのが楽しみだ」と語っていた。これは名言である。それはそうだろう、霊界を信じている者が、死ぬのが怖いとか、寂しいなどとは口が裂けても言えないはずだ。ただし彼の言う霊界を誤解してはならない。丹波には二通りの認識があって、世間一般に公開している霊界は、言わば想像の世界ともいうべきものである。二つ目は人間は死んだら骨と灰になってやがて土に回帰していくという現実認識である。それなら分かるだろう。彼はやすやすと空想めいたことを語っているのではないのだ。それにしても、死ぬのは楽しみだ――なんてのは並の人間には言えない言葉だ。

パンチラの出どころ

パンチラというのは、あまり上品な言葉ではなさそうだが、中味はなかなかのもので、アダルトＤＶＤの分野では人気がある。念のためにネットの辞書で検索してみた。

「女性用の下着がチラリと見えてしまうことを意味する言葉。チラリズムの一種とされる。一九五一年の流行語。女優の浅香光代が舞台での立ち回りの際に、大腿をちらりと見せたことから発生した言葉であり、『ちょっとだけ見えることから気づかれなかったもの。意識して見せるつもりはないが、何らかの事情でちょっとだけ見えてしまった』ことを意味する・・・・」

パンチラの出どころが浅香光代とは大発見である。むろん彼女の場合、決して下品なんかではない。しかし、アダルトＤＶＤの方はその方面のビジネスだから、乙にすましてはいられない。センセーショナルな映像にファンは昂揚する。男ではなく女が主導するので自ずから新鮮な色気を生じさせる。女が主導権を握り、男がおびえ、あたふたするなんてエロティックこの上

もない。名監督作製のＤＶＤは絶品と言っていい。当今は何かと女の方が進んでいる。これは大変結構なことである。

逆説的な迫害

文芸評論家の斎藤美奈子は公然と迫害していいのは三つあると書いている。斎藤は俗世間の通念を指摘しているのであって、推奨しているわけではない。いわば逆説的に論じていると言っていい。その三つとは以下の通りである。

① 新興宗教。私は宗教は既存も新興も一切信じていない。現代人は宗教から離れつつある。しかし信教の自由だから何を信じようとも迫害したり排除してはならないと私は自分に言い聞かせている。

② オカマ。女性作家の書いた小説に男が上司の男から接吻されるという描写があり、なじめなかった。不愉快だった。要するに慣れていないのだ。だからと言って、男同士の関係を否定するつもりはない。もし隣家に同性愛者が引っ越してきたら、容認するしかないだろう。できれば「いい人」であってほしい。

③ 変な趣味の人。上司に宇宙人を信じている人がいた。彼は優秀で特別な人間だと自惚れている。都内の名門高校から外語大学のフランス語科卒という経歴らしいが、どうも胡散臭い。私の分析では神経症的自尊心の持主で、何かと虚勢を張る癖があった。自分は頭が良すぎて、何もできないとか、周りから精神異常と言われているとか・・・つまり、天才と精神病者は紙一重と言いたいのだろう。陳腐な都市伝説を信じているようだ。宇宙人が話しかけてきたという話を聞いた。皺くちゃの顔をしていて、布の地図を取り出して、道を聞かれた・・・いかにもでっち上げとしか思えない。スタップ細胞は存在すると主張した小保方さんのように恐らく真実に錯誤が紛れ込んだのだろう。異物の混入すなわちコンタミ現象と言うらしい。宇宙人信奉者も同様だろう。こういう思考法の持主は社でも奇妙に見られていて、尊敬している社員は誰もいなかった。

岩下志麻と労働歌

映画監督の篠田正浩は、女優は一般の女性と違って特別な存在で、いわばシャーマンのようなものであると述べている。岩下志麻は当時はやっていたマンボを

篠田監督と踊っているとき、ふと直感的にひらめくものがあり、

「私はあなたと結婚するような気がする」

と打ち明けたのだった。監督は突然のことにびっくりし、いやショックさえ覚えて、二の句が告げず、返事もしないで、黙って家に帰ってしまった。監督にとって胸がときめくようなことだったかもしれない。二人は間もなく結ばれて、結婚にゴールインした。つまりシャーマンが二人の未来を予知（？）したわけだ。

岩下志麻は新婚の頃、よくインターナショナルを鼻歌で歌っていたと言う。私も格別な思いがあり、親しみを覚えている。しかし何故岩下がそんな歌を歌うのか不思議だった。後で知ったが、彼女は共産党系の前進座の代表と親戚関係にあり、子供の頃に行き来していた。したがって、インターナショナルの歌も自然に覚えたのだろう。

私の場合、六十年安保の世代だったのでデモに参加し、歌った。共産党の有名な代議士の演説も聞いた。これほどスケールの大きいデモはなかった。あたかも革命でも起こりそうな雰囲気を感じさせた。もっとも革命は幻想でしかなかった。それどころか、国会で強行採決されると、世の中は嘘のように静かになった。

それにしても、シャーマンの岩下志麻がインターナショナルの歌を歌うなんて見モノである。卑弥呼と労働歌の組み合わせはユニークではないか。

旧時代の道徳観

江戸時代から明治大正にかけて、またそれ以降も、儒教的な考え方が日本を覆いつくしていた。さぞかし窮屈に感じた人もいたことだろう。自由人の武者小路実篤もその一人ではないだろうか。私が初めて実篤の『お目出度き人』を読んだ時、興味とも違和感ともつかぬ面白さを覚えた。主人公の「自分」は片思いの女性がいるが、口も聞いたことがない。そして、自分は女に飢えているなどと臆面もなく呟く。時は明治時代で、しかも華族の子弟だというのに堂々と書いている。たとえば次のように・・・・

自分は女に餓ゑてゐる。

誠に自分は女に餓ゑてゐる。残念ながら美しい女、若い女に餓ゑてゐる。七年前に自分の十九歳の時戀してゐた月子さんが故郷（くに）に歸った以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓ゑてゐる。

「餓えてゐる」の連続である。二十代半ば頃なら当時だって令和の今だって同じだろう。私だって同類だ。実篤は何故こんな風に書いたのか。おそらく古い時代の儒教すなわち孔子の思想に対する反発があったに違いない。ふと私は夏目漱石の『三四郎』を連想した。三四郎が熊本から上京する途中、汽車の中で遊び人の年上の女と知り合いになり、迷惑でも名古屋で途中下車したら、旅館を教えてもらえないかと頼まれる。女はついてくるので、旅館では二人を一室に案内する。三四郎は女をどうとかする気はないので、うまくかわし、何事もなく一夜を明かす。次の日の朝、別れるのだが、女は三四郎に向かって、

「あなたはよほど度胸のない方ね」

と痛烈な嫌味を言う。女がこれほど積極的になっているというのに、何もしないのはどうかしている。しかし欲望がないわけではなく、三四郎の中身は女に飢えている実篤の「主人公」と全く同じと言っていい。三四郎の場合、行きずりの男女が性行為に及ぶことに戸惑ったとみえる。

作品は漱石の方は明治三十一年、実篤は三十四年の作である、主人公は二人とも二十代。余談だが、三四郎と女との邂逅は、作者が考えたのではなく、弟子の松根東洋城（とうようじょう）の友人の実際にあった体験談だという。私は東洋城という変わった名前の人物は中学の頃から強く惹かれていたのだが、実体を知ったのは年月を経てからで、相当の人物であることが分かった。本名は豊次郎（一八七八―一九六四）。一高から京都大学を経て、宮内省の役人になり、その一方で漱石に弟子入りして俳句を教わった。俳句の方では「偉大な俳人十七人」の一人に数えられているほどである。有名な俳句に次の一句がある。

のどけさに寝てしまひけり草の上　東洋城

それはさておいて、漱石が遊び人の女に「よほど度胸のない方ね」と言わせているのは、作者もこうでも書かずにはいられなかったのだ。漱石は単なる堅物ではない、内心の本音を女に託して吐露しているのだろう。